〔駒沢女子大学　研究紀要　第九号　p二五～三〇・二〇〇二〕

天台本覚法門についての覚書

――『漢光類聚』巻二の註釈的研究（二）――

A Note on Hongakuhomon
― An Annotative Translation of the Kankoruiju II ―

佐々木　俊　道

Shundo SASAKI

一、はじめに

本論は、『駒沢女子大学日本文化研究』第四号所収の同名の論文の続編であり、本文献に関する概略、及び註釈方法についてはそちらの方に譲る。以下、本論については、前回のものを踏襲し、本文の註釈を中心に構成する。しかし、単なる註釈に留まらず、註の中で、本文献の歴史的な位置付け、また、思想、教理的な側面についても逐次論じていきたい。

二、本文編

南岳所修の一心三観の事

南岳、恵文禅師に随て三重の一心三観を伝う。(一)経蔵寺において三七日（みなのか）の間、三重の一心三観を修す。(二)

初七日の間、迷悟相即の一心三観を修す。一心三観とは謂く「無明塵労即ちこれ菩提」。無明顛倒の心に三諦の理を具す。無明迷情の心に色相無きは空なり。慮知あるは仮なり。空と仮と一心に在りて悪から

ざるは中道なり。無明の自性既に三諦を具す。故に即ちこれ菩提なり。

第二七日には生死覚用の一心三観を修す。謂く生の体は仮なり。死は空なり。一心は中道なり。一心に生死の相あるは本有の三諦なり。

後七日には実相の一心三観を修す。別して生死煩悩等の相を分別せず。ただ行者の一心を観じて三諦実相の理に通達するなり。

天台所修の三重の一念三千観[四]とは、一には観心の一念三千、二には観色の一念三千、三には観実相の一念三千なり。

介爾も心あらば即ち三千を具するは観心の一念三千なり。正しく「無明塵労即ちこれ菩提」に当たれり。

観色の一念三千とは、彼々の三千互いに遍してまた爾なり。一色一香の当体三千具足するが故に生死即涅槃なり。第三の実相の一念三千とは色心を分別せずして直に本不生の理において三千の本分を通達す。

観不思議境とは即ち実相なり。円家至極の一念三千とは正しく本不生の実相に三千を観ずるなり。

初二の一念三千は因縁生の上の所立。第三の純一実相の一念三千の観は本不生際の所立なり。云云。

章安大師の三重の空観とは、初めは自心の本空を観じ、無明塵労の心体、形相も無く、自他共無因生も無き故に空なり。「無明塵労即ちこれ菩提」の文、心空に当たれり。自心の空寂を観じ畢て、次に自色本空を観ず。生死の身体、空寂なるが故に生死即涅槃なり。色心本空を観し畢て、次に滅諦の空を観ず。涅槃三諦の本理、空寂にして更に不可思議なるが故に、「純一実相にして実相の外に更に別法無し」と云うなり。

以上三師各別の三重の口伝かくのごとし。末代の行者も各々意楽に随いて三師の行法のごとく止観の行を修すべし。云云。

(一)、**一心三観**　一心三観についての語句の説明は、前回の箇所を参照のこと。一心三観に関しては、いわゆる「恵心流」の教学としてのまとまり、ある意味での完成がなされていくのは、『一流相伝法門見聞』(『二帖抄』)あたりからになる。つまり、本覚法門が、「三重七箇の大事」として、形式が整えられていく。三重七箇の大事の七箇とは以下の通りとなる。

一、一心三観。

二、心境義。

三、止観大旨。

四、法華深義。

五、円教三身。

六、常寂光土義。

七、蓮華因果。

そして、これらを「教、行、証」の三重に説くのが、三重七箇の大事となる。

さらに、一心三観については、境としての一心三諦と、智の一心三観に分別し、前を迹門、後を本門とし、後者を凡夫の一心、つまり、現実の生活の日常の心に掛けることにより、本門立ちの本覚法門が完成されることとなる。

(二)、**経蔵寺**　創作された架空の寺であると思われる。同様に第一章には、智広寺なるやはり架空の寺が出てくる。

(三)、**三七日**　いわゆる三十七日という期間ではない。七日を一くぎりにした数え方で、最初の七日間を初七日とし、次の七日間を二七日とし、その次を三七日とする。よって、正確には、3×7で21日間ということになる。

現在でも、仏教においては、人が亡くなった時に、七七(四十九)日までの中陰(有)の間は、これと同じ数え方をし、最初の七日間を初七日とし、以後二七日、三七日、四七日、五七(三十五)日、六七日、七七日というように続く。

(四)、**一念三千**　語句の意味については、前の箇所を参照のこと。七箇の大事の二の心境義においては、心、智、境の三つが未分一体(不思議未分)の天心独朗の一念三千が説かれる。

六個の口伝の事

五個の口伝は上のごとし。この上に一言をもって今の文の前後を口伝するなり。

口伝において多義あり。蓮実房、証者見の言をもって止観の法門を口伝したまへり。意は知識経巻に値ひて止観の実談を聞いて正しく無想の位に入証す。止観に通達すとは今の文をば心得べし。根性、鈍根にして有相権教の執情の者は意得べからざる法門と云ふ意なり。今の『心要』の末に、「韻高うして和するもの寡し。」(一)と云へるはこの意なり。

止観不思議の内証は仏知仏見の境界なり。仏知仏見また遠からず。今の文によって止観の実義を心得るは、これ仏知仏見なり。

楞厳院の和尚(二)、「円人見」の一句をもって止観の法門を伝へり。「証者見」と云へるは、言は限りて広からず。「円人見」と云ふ時、已証未証俱に摂せらるる。故に広大と言ふなり。

横川の大師(三)は、「知者は応に知るべし。知らざる者は知るべからず。」と云へり。一句はこれ止観深義の口伝なり。止観の意はかくのごとく解するも止観の機なり。解了せざるもまた止観の機なり。故に一切相違あるべからず。云云。

以上、円頓止観の前後の口伝かくのごとし。今の文は南岳最後の時、天台に伝授したまへり。天台、章安に伝授したまへり。高祖大師はこの文を秘して止観正説に載せたまはず。章安、兼済を存してこの文を

序文に書き顕したまへり。一家天台の御相承の依文、処々にこれありといへども此の文には過ぐべからず。

今伝うる所の諸の口伝は山家の大師より都率にいたりて六代は紙上に載せず。都率初めて少々口伝の義を注す。しかれども多は面受口決を本となせば、紙上に載る所、委細ならず。予、末代の童蒙を助けんがために委細に注釈す。あへて顕露に及ぶべからず、云云。

(一)、**「韻高うして和するもの募し」**『摩訶止観』第八上（仏教大系本五、一〇九）の荘子『除無鬼』からの引用。教えが高尚すぎると、それを理解出来る者が少ないという意味。

(二)、**楞厳院の和尚**　恵心僧都源信のこと。

(三)、**横川の大師**　同じく恵心僧都源信のこと。

(四)、**都率**　覚超のこと。源信の門下。良源は、法華の心要を源信に、略義を覚運に、略文を覚超に授けたと伝えられる。また、覚超は、覚運にも師事したので、恵心流においては、三部共に伝えられたとされる。

(五)、**童蒙**　呉音にて「どうもう」と読む。子供のように無知である者のことを言う。

「いかなるを円頓の法と名づくるや」已下の文

「いかなるを円頓の法と名づくるや」とは問なり。心は上に「煩悩即菩提。生死即涅槃。」と云へども、正しく煩悩即涅槃。生死即涅槃の道理未だ聞かず。是より以下重ねて上の文を釈するなり。

上の文は直に諸法の体性を挙げ、或いは内証の修行を伸ぶ。然もその義委細ならず。円の実義を顕さんがために問いを発するなり。「生死即法身…と聞く」(一)より正しく円教の相即の旨を釈するなり。

相即には重々有り。一には不思議の相即。二には徳門の相即。三には体門の相即なり。今、徳門に約して相即を明かす。煩悩、業、苦の三道をもって法身、般若、解脱の三徳と心得を円人と名づく。生死を体となして法身の相に即す。道理と云うは生死の体なり。生死を体となして或いは煩悩を発し或いは業障を起こす。生死は是れ總体なる故に法身と云ふなり。煩悩の当体を般若と云う事は、煩悩とは心なり。心は慮知を相となす。慮知の体はまた是れ本有の自受用身なり。

『伝法決』に云く、「自受用身とは正しく一心の慮知の分別を指す。」と云へり。煩悩の当体既に慮知を具す。煩悩即般若の道理分明なるか。

結業即解脱と云う事は、解脱とは即ち応身なり。応身は是れ作事作業の義なり。六塵の縁を歴て諸の業を作す。即ち本有、応身して形となる。故に業即解脱と云ふか。此の文は徳門の相即に当たれり、云云。

問ふ。一家天台の心、生死の当体即ち法身なりと云ふ可しや。

答ふ。しかなり、云云。

疑って云く。たとひ円頓の意なりといへども事相を壊るべからず。

生死是れ流転の妄業なり。いささか直に法身の体と心得べきや。

答う。元より権実二教の機をもって、この道理落居すべし。権教の輩は、自性僻めるが故に生死即法身の義を知るべからず。今の経に「無智人の中で此経を説くことなかれ」と云うが故に、権教の人の為にはこの義無用なり。もし円機に対して云はば、円は円融相即の義なり。これに何の疑難を生ずべきや。ただし心地に引き当て心得るに二の道理あり。

一には、もし煩悩の体、般若にあらずんば、生死の体、法身にあらずとは、生死即法身とも思惟せらるべからず。二には、水火一体の文思い合すべし。その上、一家の意、生死も法身も倶に不可得にして生死の相もこれ無し。法身の相もこれ無し。本分不思議なる処を強いて生死即法身と云うなり。

『伝法決』に云く、「一家真実の相即とは煩悩、菩提本より不可得なるを強いて煩悩即菩提。」と云へり。この文は境智不二の相即に当たれり。また生死の当体も三千具足。法身の当体も三千具足なるが故に生死即法身なり。云云。

問う。一家の意、結業の当体即ち解脱なりと云うべしや。

答う。文に云く、「結業即解脱」と、疑って云く、結業は即これ妄心の所起なり。解脱は応仏の化他の妙体なり。

問う。結業の当体即解脱と意得べきや。

答う。生死即法身の義の如く心得るべし。云云。一には結業の自体、解脱の自体ともに畢竟、不可得なるがゆえに、結業即解脱と云うなり。二には結業、解脱ともに三千具足なるが故に余義は上のごとし。云云。重ねて難じて云く。尚もって思ひ難し。たとえ円頓の実談なりと雖も、悪業の当体を如何がして解脱の妙体と意得んや。もし然らば、殺生、偸盗等の悪業を止観の行者は、畏れずして、恣(ほしいまま)に作行すべきや。

答う。もとより答え申すところ、結業の自体に三千三諦円満して闕減無き故に結業即解脱と云うなり。但し止観の行者恣に悪業を作るべきやと云うこと、全く然るべからず。これに多種の道理あり。

一には結業、解脱ともに不可得にして不思議の法然なるを業即解脱と名づく。もししからば何ぞ偏堕の情に墜ちて悪業を作すべきや。これ一。

また悪業も三千具足、解脱も三千具足、故に結業即解脱と云うは自他不二にして諸法無我の一性となる。この時も何ぞ別して彼此の差別を存して悪業等を作すべきや。これ二。

但し止観の内証より立ち還って任運無作にして悪業等を行ずをば、更に相違あるべからず。観音、海人と現じて魚蟲を殺す等これなり。云云。覚悟の知見の前には何ぞ解脱、応身の徳にあらずや。云云。

山家の大師の仏立相承の口伝にこの事あり。謂く一には境妙心蟲。謂く法々塵々にして自体の三諦三千具足して闕減せず。故に境妙なり。然りといへども衆生の流転して知らざるが故に心蟲なり。

二には心妙境蟲覚悟の知見は自他此の一切の法、皆悉く三千具足の覚体と心得れば他人もまた我が一心なり。然るに他人は妄心を起こして行者の心と相応せず。故に境蟲なり。

三には心境倶に妙。謂く円頓行者の知見の前には所起の善悪皆これ

有脱解体の性なり。故に心境倶に妙なりと云う。もししからば円頓行者の成し得ての上には悪業、更に違論あるべからず。云云。

(一)、**「生死即法身…と聞く」**『天台伝南岳心要』の本文に「生死即法身、煩悩即般若、結業即解脱と聞くなり」とある。この部分は『摩訶止観』巻一上（仏教大系本一、一一七）の引用。

(二)、**偸盗**　他人の財物を盗むこと。十悪業のうち、身三の一つ。五戒の一つ。

(三)、**闕減**　欠けていること。ここでは三千三諦が円満していないことを指す。

(四)、**蟲**　蟲は虫に同じ。